



TITLE:

井上俊教授退官記念号によせて

AUTHOR(S):

宝月, 誠

---

CITATION:

宝月, 誠. 井上俊教授退官記念号によせて. 京都社会学年報 : KJS 2001, 9

ISSUE DATE:

2001-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/192617>

RIGHT:

# 井上 俊 教授退官記念号によせて

宝 月 誠

本号は2002年3月末をもちまして文学研究科・文学部をご退官されます井上俊先生を記念して刊行されたものです。井上先生から薫陶を受け、学問のみならず研究者としての生き方で学んだ大学院生をはじめ、研究室の同僚・後輩が先生に感謝の気持ちをこめて寄稿した論集です。掲載されております関係者一同の論文・エッセイは、井上先生の幅広い学問的関心にふさわしく、多彩なテーマとなっております。

井上先生は本学の大学院を修了後、大学紛争のさなかに助手に就任され、教室をまとめていく上で大変ご苦労をなされました。その後、神戸商科大学を経て大阪大学の教養部と人間科学部で長年指導にあたられた後に、再び京都大学にお戻りになりました。この間の先生の研究者や教育者としてのご活躍はもとより、各種学会や社会で指導的な役割を果たしてこられましたことはあらためて紹介するまでもないことと思います。城戸賞を受賞されました『遊びの社会学』で学界に颯爽と登場されました当時の先生は、後輩の私などにはまぶしい存在でした。華々しいデビュー後も先生の情熱と学問的生産力はますます高まり、先生のご活躍によって日本での文化社会学やスポーツ社会学が確立されたといえます。

先生が京都大学にお戻りになられてまもない頃におっしゃられたことが今でも耳に残っております。「文学部は僕がいた頃とおなじだね。カリキュラムも何もかも昔と少しも変わっていないね」と、さも楽しそうに述べられた言葉です。それは皮肉や揶揄するつもりでおっしゃったことではない。時代に流されず、迎合することなく、安易な改革を拒絶して、学問の伝統を守ろうとしている文学部の姿勢への半ば驚きと共感を込めて述べられた言葉です。人間科学の研究や教育においては上滑りのことではなくて、伝統の継承と再生が重要であることを一番よく理解し、自ら実践されてこられたのは先生にほかにありません。こうした姿勢は、井上先生が社会学研究室に残されたメッセージとして、われわれ一同今後とも継承していきたいと思います。

井上先生をよく知る人ならだれしもがいうように、先生は穏やかな人柄と鋭い分析力・批判力を併せ持つお人です。こうした人柄のおかげで学生・院生は研究を進める上で先生から多大なメリットを受けることができました。問題点のシャープな指摘と該博な知識に基づく論理的な話によって学生・院生は常に啓発されるだけでなく、やさしく励まされることによって、どれだけ研究意欲が高められたか計り知れません。また、学生諸君だけでなく私も研究室のスタッフも先生のご尽力に支えられてきました。研究室の調和が保たれましたのも先生のお人柄のお蔭ですし、研究室で生じたさまざまな出来事に対しましても、いつも先生からの確かな指導と適切なアドバイスを受けることができました。

かけがえのない先生がご退官なされますことは社会学研究室一同大変残念なことです。この特集号を先生から得た数々のご恩への感謝の気持ちの一端とさせていただきます。



井上 俊 教授